
骸崩の妖 ~ Sword of Guardian ~

虚里 無銃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

骸崩の妖〜Sword of Guardian〜

【Nコード】

N2394X

【作者名】

虚里 無銃

【あらすじ】

世界は矛盾によって構成されている。矛盾のない世界に歴史はない。

語り継がれるは悪か正義か……。

日常不変——イツモドオリ——

僕は、天月今宵は一体何の為に生まれてきたのだろうか？時々そんな事を僕は考えてしまう。

人の存在意義は人々の歴史を大きく塗り替えてきた。過去の英雄、科学者、冒険家、彼らは自らの存在意義で未来に歴史を刻んだ。彼らが居なければ歴史は動かず、人類は最悪の未来を迎えていたのかもしれない。

僕は一体何のために生まれ、そして生きている？それを知った時、僕の未来はどう変化するのだろうか？

梗越寺龍妃は少し変わった少女だ。男のような立ち振る舞い、男のような喋り方、男より男らしい女性、それが梗越寺龍妃という人物だ。

そしてこの変な少女は僕の少ない友人の一人でもある。特に経緯など無いが、席が近かったからというのが一番の経緯なのかもしれない。僕らの学校は制服はあるが私服でもいいという少々特殊な学校のため、最初出会ったときは本物の男のだとばかり思っていた位である。

しかし顔立ちは整っているし、体格も悪くない。身長も160cmを少し越えている位で女性としてはかなり美しい方だ。実際クラスの中でも何人が告白した奴が居たらしい（だが全員断られたらしい）。

「やあ龍妃、今日は遅かったじゃないか」

僕は登校してきたばかりの龍妃に声を掛けた。龍妃はいつもどおり可憐な、それでいて気だるそうな表情のまま僕の隣の席に鞆を置いた。

「単純に寝坊をしたただけだ、それより今日も暑いな、もっと薄着し

てくれればよかった」

そう言つて龍妃は席に着くとシャツの胸元をパタパタと仰いでいる。白いシャツが汗に濡れてさらしを巻いているというのが少し見えている、ということは言わないでおこう。

龍妃の服装は年頃の少女のそれとは完全に異なるものだ。いつも白いワイシャツに黒いズボン、他の少女達は皆、スカートやらレデイスのジーパンなどを着てきている。更に短く乱雑に切られた髪の毛で一見すると可愛い男の子に見えないことも無い。

「それより龍妃、昨日こんなのが届いたんだけど」

そう言つて僕は昨夜届いたメールを開いて彼女に見せた。内容は今日午後七時半より人喰いマンションにて肝試しを行うというもの。

人喰いマンション、もとい蓮杖マンション。このマンションの1304号室は人を喰らう部屋として七年程前から恐れられていた。事の始まりは十五年前、この部屋に住まう蓮杖桐恵というオーナーの息子が変死体として発見させる所から始まった。

蓮杖氏はまるで吸血鬼に血を吸われたかのように干乾びた状態で発見された。そして鳩尾には刃物で刺されたような刺し傷が一つ。

そして第二の事件はその八年後に起こった。今回の犠牲者は二人の夫婦だった。苗字は北条。子供を一人残し心中した。妻の四肢をバラバラに切り刻んで、夫は自らの首を切り落として死んでいたらしい。

それ以来、誰一人この部屋には近づくものはいなくなり、やがてこのマンションからも逃げ去るかのように居なくなつた。だが、その後も1304号室では時折変死体が見つかつているらしい。

龍妃は少しばかり興味のある顔をした。そして、

「面白そうだな、行つてみよう」

僕は少し予想外だった。いつもの龍妃であれば、くだらないと言つて断るはずなのに。

「珍しいじゃないか、龍妃がこんなのに興味を示すなんて」

龍妃は少し微笑を浮かべて、

「蓮杖マンションには前から興味があつたんだ、これで行く予定が出来た、お前は どうする？」

「どうするといわれても、龍妃が行くなら僕も行くしかないだろう。」

「僕も行くよ、じゃあ放課後、僕の部屋に来てくれ」

「わかった。あ、そういえばお前昼はどうするんだ？ また購買か？」

話題が一つ終了すると龍妃はいきなり昼食について尋ねてきた。

「いつもどおりかな、僕は自炊できないし、コンビニ弁当だと学校に着く前にぐちゃぐちゃになるだろうからね、その点、購買は出来立てホヤホヤの弁当があるから」

僕がそう答えると龍妃は鞆から一つの弁当を取り出した。

「だろうと思って、弁当を作ってきた。お前栄養バランスの悪いものばかり食ってるから、たまには野菜とかも思ってたな」

なんとということだろうか。あの梗越寺龍妃が弁当を作ってきた。しかも男子である僕に。が、よくよく考えるとそこまで嬉恥ずかしいイベントでもない。彼女の場合これは小さな親切大きなお世話という奴に近い。だからそこまでの意図があつてということは絶対になんていえる。

僕は一つ大きな溜息をついた。それを見て龍妃は少しムツとした。

「人がせつかく心配してやったのになんだその態度は」

「大きなお世話だ、でもまあその好意は貰っていくよ、ありがとう龍妃」

僕はそう言つて龍妃の持つている弁当を貰っていく。龍妃は気に食わないという顔した。

「ため息吐くくらいなら貰わなきゃいいのに」

ブツブツと龍妃は文句を言っていたが、僕は気に掛けずに弁当を鞆の中へとしまった。

そして昼休み、僕は龍妃と机をつなげて昼食を取る。

「この唐揚げ美味しいな。にんにくも効いてるし、かなり手が込ん

でるじゃないか」

僕がそう褒めると龍妃は満更でもない顔をして、

「自分が食べるならまだしも他人に食べてもらうものだからな、それなりに手が込んでいるのは当然だ。ちなみにそれは昨日から漬けていたものだ。それよりそのミニトマトについて意見が訊きたい」

僕は龍妃に言われるがまま弁当の端にあるミニトマトを口へと運んだ。噛むと中からは果汁が溢れ、甘いトマトの味が口の中に広がる。

「うん、美味しいよ。自家栽培したのか？」

龍妃は得意げにそうだと言った。龍妃の作ってくれたお弁当は一流料亭も顔負けな位美味なものだった。

そして、時は過ぎていく。僕の日常が非日常になるその時が、刻一刻と忍び寄っているなどということをこのときの僕は知りもしなかった。

日常不変くくイツモドオリく（後書き）

次回予告

光のある場所はいずれは廃れ深き闇を生む。光があるならばそこにはそれだけの闇が潜んでいるのだ

次回、衰退構造くクスレオチルく

衰退構造くクスレオチル

僕は放課後、龍妃が来る前に足りなくなった500mlの水の入ったペットボトルを五本と夕食のコンビ二弁当を購入し、今暮らしている縁寿荘203号室へと帰宅した。

僕が一人暮らしを始めた理由は実家で邪魔者扱いされているからだ。僕の家は雨月というこの町では有名な地主の家で、代々当主は女が勤めるということになっている為、男である僕は当然家では必要とされないのである。それでも雨月の名を落とさないためにも高校の学費くらいは出してくれている。

そんな僕は家では居所が無い為、家を飛び出しここ縁寿荘で暮らしているというわけだ。龍妃はもちろん、その他の誰もそのことを知らない。

ちなみに彼女も梗越寺という家系の長女で、十六にして代々この玉月の地で武道に勤しむ一家の現党首となっている。

その理由は彼女の父、梗越寺獅子王が彼女の誕生した一年後に帰らぬ人になった為である。龍妃の口調や立ち振る舞いが男らしいのも、もしかすればそれが影響しているからかもしれない。

僕が夕食を済ませた十分ほど後、龍妃が僕の部屋へやってきた。

龍妃は学校に着てきた服とは違い、白のキャミソールに黒のYシャツを羽織っている。下は動きやすいようにとジーンパンを履いており、腰にはウエストポーチをつけている。

「準備万端って感じたな、結構龍妃ってこういうの好きなのか？」僕は少し気になって訊いてみた。龍妃は腕を組んで壁にもたれかかり、

「違う、人喰いマンションに興味があるんだ。肝試しに興味があるわけじゃない」

と言った。僕は「あつそ」と軽く言い放った。それにしても龍妃っ

てこうしてみると結構可愛らしいな。いつもは何というか近寄りたいたいオーラを放っているのに、黙っているときの龍妃は普通の女の子みたいで可愛い。

などと思いつつ、龍妃を見ていると龍妃が此方の視線に気付き、

「ん、なんだ？ オレの顔に何かついていているのか？」

と質問してきた。本当に黙っていれば可愛いらしいのに……。

行くまでの間僕らの話題は人喰いマンションについてとなっていた。

「それじゃあ、あの人喰いマンションの北条夫婦心中事件の犯人はその息子さんだっというのか？ 幾らなんでも当時十二歳の子供が親を殺すなんて僕には到底思えないが？」

僕は龍妃の意見に対して一般論をぶつけてみる。龍妃の意見はいつも一般的には考えにくいものばかりのため、必然的に僕が一般論を述べることになる。

「じゃあ逆に何の問題も抱えてない夫婦が何で無理心中なんてするんだ？ それに子供が一人生き残ったのは何故だ？ 無理心中なら普通子供だって死んでるはずじゃないか」

僕はそこで確かにと思ってしまった。通常の無理心中であれば子供一人残して死ぬなどとは思えないし、仮に殺せずに自分達だけ死んでしまったのだとしたら、それはそれで無理心中とは呼べない。

「だとしても十二歳の子供が親を殺す理由なんて僕には思いつかないよ」

それに対して龍妃は言った。

「もしかしたら、只殺したくて殺したのかもしれないな。何の問題も抱えていない家庭なら子供が一人取り残されても犯人なのではないかと疑われる可能性は極端に低い。だからこそ彼は……」

「ふざけるな、そんなことがあるわけない！」

僕は思わず立ち上がり叫んでしまった。龍妃は少し驚いた顔をして僕を見た。

「ごめん、大声出して」

僕は座りながら謝罪した。龍妃は溜息を吐いてやれやれと首を振っている。

「今宵、確かにお前の言っていることは一般論だ。だけどな、異常者なんてこの世に五万という。それを忘れるなよ」

龍妃は真面目な顔をしてそう言った。時刻は既に家をでなければいけない時間だった。

集合場所である蓮杖マンシヨンの前に着いたがまだ誰もいなかった。集合時間まではまだ十分弱余っていた。

龍妃はガードレールに腰掛、ニンマリと楽しそうに笑いながら蓮杖マンシヨンを見つめていた。何がそんなに楽しいのか僕にはまったく理解できない。

蓮杖マンシヨンは長年使われない所為か、錆びれ果て廃れていた。所々安全のために作られた手すりが壊れているところもあった。そして時刻は七時半。肝試しを行うために集まったメンバーの全員が揃った。

各人それぞれでコミュニケーションを取り合っていると、一人の男が僕らのほうに来た。その男は、ダボダボのポロシャツにダメージの入ったジーパンというシンプルな格好だったが、髪の色は金髪に染め上げられていた。

「やあ、君達も肝試しに参加するの？」

龍妃は冷たい目で男を睨みつけた。こういう男を龍妃は結構嫌っている。

「ナンパだったらお断りだ、既に連れがいる」

男はニタニタと笑いながら、龍妃にこう言った。

「ゲームは既に始まってるんだ。一度目をつけたら絶対に獲物は逃がさないぜ、俺は」

龍妃は笑いながら去っていく男を驚いた顔をして見た。

ゲームとは一体何のことだろうか……。と、疑問に思っていると僕に龍妃はいきなりこう言った。

「今宵、お前はもう帰れ」

僕はまるで意味が分からないままだった。いきなりそんな事を言われて帰れるわけが無い。

「ヤダね、言つたろ？ 僕も肝試しに出たいんだって」

龍妃はそれを訊いて必死になった。

「いいから帰れ、今回は諦めろ」

僕は龍妃の忠告を無視した。龍妃は苦虫を潰した様な顔をして僕を見た。

そして幹事の男の合図で僕らは中に入っていく。一人また一人と、まるで闇に誘われ吸い込まれるかのように……。

衰退構造くクスレオチルく（後書き）

次回予告

人は形のあるものには恐怖しない。形の無いものにこそ恐怖を抱く。

なぜならそれは得体の知れない正体不明の化け物なのかもしれないのだから……。

次回、恐怖体験くキモダメシく

恐怖体験〜キモダメシ〜

形はそれだけでそのものの存在を示してしまう。だから人は人の形をしている。猫は猫の形をしている。

しかし、本質は違う。本質はそのものの根源、生まれの由来から意味までの全てを示してしまう。だから誰にも見られてはいけない。もちろん自分にも。

なぜなら本質は時に醜い化け物の形をしているからである。

時に僕は後悔というのは何故先に来ないのかを考えようとしたが、答えは余りに簡単すぎた。

悩んだ拳句龍妃に長い論説をしてもらおうと思っていた僕の考えは苦しくも自分の手によって握りつぶされた。

で、結果だが…、結局のところ後に悔いるから後悔というのだから、だ。

それで僕が一体何について後悔しているかといえ、この肝試しに参加したことである。

始めの内は大したことないと思っていたが、次第に血痕や人の白骨の一部ではないかと思われるものが増えてくると僕は寒気を覚えるようになってきた。

蓮杖マンション、この玉月町の都心部に蓮杖つという地主が立てたマンションで、立てた当初はそれはそれは賑わったらしい。だが、ある事件が元でそのマンションも只の廃墟になってしまった。

それが北条夫妻心中事件。夫婦間に問題やトラブルは一切無く世間体もいいこの夫婦がいきなり死んだ。それを皮切に居住しているものは居なくなり、今は只の廃墟同然の建物となってしまう（今年末には取り壊されることも決まった）。

龍妃は何故かそんな曰くつきの廃墟に興味を示した。その目はま

るで秘密の遊び場を見つけた少年のような期待に溢れた目をしていった。

蓮杖マンションの内装を説明すると長方形が少し北に歪んで、それとは別に連絡橋で繋がったもう一つの円柱上の建物があるという少々変わった形の建物だ。ちなみに出口は南にある。

それにしてもさっきからひたすら歩いている気がする。十三階を目指しているのだろうか？

そして八階に到着するとそこで階段が途切れている。どうやら此処からは東棟の階段を使用しなくてはいけないらしい。

僕は思わず溜息を吐くと龍妃は、

「お前の後ろに犯人がいるぞ」

僕は思わず後ろを振り向いた。しかしそこには誰も居なかった。龍妃は笑いを堪えてる。

「龍妃い！」

「悪い悪い、余りにお前が怯えているものだからつい、な」

ついやったで済めばいいよ、と僕は龍妃に言った。

「いやあ、それにしても何がそんなに怖いんだ？」

龍妃は目に涙を浮かべながらそう訊いてきた。よほど面白かったのだろう。

「そりゃ誰だつて血や骨を見れば怖いだろう？」

僕は苛立ちを込めながらそう言った。そういうと龍妃は鼻で笑った。「いやすまん、余りに普通だったことに驚いてな、その程度の恐怖ならむしろ楽しく思っていたほうがいいぞ？ 大体恐怖というのはこんなものじゃ駄目なんだよ。いいか、人は形のあるものに恐怖しない、人が恐怖する条件は、

正体が不明であること

の一点だ。まあ実際は他にもいろいろあるのだが一番重要なのはこれだ。

正体が不明ということはそのものの形がわからないという事だ。これに対して人間は自身の想像力、考察力などいろんな力で最悪の

恐怖の形を想像してしまう。いや連想していると言った方が正しいか、

最悪は災厄を引き起こし、恐怖は己の崩壊を意味することになる。これが人の恐怖の形だ」

まああくまでオレの持論だがな、と彼女は最後に付け加えた。

「でもそれなら、僕らがホラー映画とかを見て恐怖しているのは何故？ その持論なら形あるものに恐怖は覚えないんだろ？」

「一概にそう、というわけではないさ。事実そういう恐怖というのは、あくまで一般的な恐怖の形さ。オレが言っているのは最悪の恐怖の形だよ。」

そういうものに対する恐怖というのはあくまで恐怖というよりは驚きの一種としても捉えられる。更に言えば、そういうものは恐怖のうちでも一番興味に近いものだ。そもそもそれを創っているのはあくまで人間なんだから最悪の恐怖は生まれない。

人を恐怖させるには人じゃ役不足なんだよ、それこそ人外でなくては最悪の恐怖は創れない」

龍妃の長い論説は目的地に続きまで続いた。最後のほうは心理学的な話まで入ってきたくらいだ。

そして、目的地である1304号室前に来ると、龍妃は今まで僕に見せたことの無い程、深刻な表情で僕に言った。

「今宵、あの扉は非日常への入り口だ。絶対にお前の中に入るな」僕にはその言葉の意味が分からなかった。しかし、この忠告は僕の日常を守るために龍妃が言ってくれた最後の忠告だと知ったのはもう少し後の話……。

恐怖体験〜キモダメシ〜（後書き）

次回予告

入ってはいけない日常から外れた世界。そこに浮かぶ二つの月は妖しく殺しあう。全ては己が望みの為に
次回、破壊衝動〜コロシタイ〜

破壊衝動／コロシタイ

1304号室、そこはいまや近づくものも少ない悲劇の現場。最初の頃は家を持たぬものが何も知らず使っていたこともあったそうだが、たいていの場合そういう人は次の日には死体になっているらしい。

龍妃は言った。此処には入るな、と。

幹事の男は言った。

「では中に入りたい人はいますか？」

手を上げたのは龍妃と先ほど此処に入る前に話しかけてきた男のみだった。僕はそれを見てすぐさま手を上げた。

「三人、ですか。では懷中電灯を貸しますのでいつてきてください」
龍妃は僕の耳元で言った。

「入るなと言ったろ？ 聞いてなかったのか、馬鹿」

「うるさい、龍妃を何処の誰かも知らない奴と二人きりに出来るか」
龍妃は苛付いたように勝手にしろ、と言ってきた。

そして僕らは中に入った。扉が閉まると男は言った。

「いやあビックリしたよ、梗越寺龍妃は当然にしても君まで入ってくるだなんて」

男はそう軽い口調で言った。

「てことは、君はこの娘の専属魔術師つてことでいいのかい？」

魔術師……？こいつ一体何を言ってるんだ？

「違う、そいつは関係ない！」

龍妃は男を睨みそう言った。二人の会話は僕を置いてどんどん進んでいった。

「そう、でも俺には関係ない事だし。どちらにせよ、この場で狩らせて貰うよ？ 梗越寺！」

男はそういうといきなり龍妃に飛び掛った。

龍妃は護身用のナイフを抜き出し対峙した。男の爪がナイフに当り火花を起す。

「はははは、楽しいなあ。楽しいだろう、梗越寺ちゃん？」

何度も何度もナイフの剣先と男の爪が交差する。その度に辺りには火花と男の笑い声が木霊する。

男は攻撃と逃避を同時に行っている。壁や床を蹴り引つかくようにして龍妃を襲い、そしてその勢いのまま反対方向の壁へと移動していく。この流れるような一連の動作に龍妃は少々戸惑いながらも対処している。

しかし、突如男は攻撃を止め、うーんと唸りながらこう言った。

「どうしたんだ？骸崩の妖って言うくらいだから期待してたんだけどねえ、なんか期待はずれだよ、あんた」

「いきなり飛び掛ってきといてよく言うぜ、この猫野郎」

「猫ねえ、君の眼にはそう見えてるのかい？その骸崩ぎようほうの眼には」

『バックに居るのは鴉柳んとこの魔術師か、あの時下手に喧嘩売らんじゃなかったぜ』

龍妃はつま先をトントンと二度叩き、男の方を見た。

「なるほど、てことはお前が北条刹那ほつじょうせつなか。八雲が滅んで北条に付いたとは言ってたがその相手がこんな奴だとはな」

北条？ということは、この男が北条夫妻心中事件の犯人かもしれない男？

北条と呼ばれた男はばれちゃったか、とワザとらしく振舞った。

僕は北条に訊いた。

「どうして自分の親を殺した？」

「うーんそうだな、この力がどういふのかよくわかんなかったし、外出れなかったから」

そう彼は軽く言った。僕の中からふつふつと怒りがこみ上げてくる。何の理由も無く、そんな簡単に人を殺せるコイツが理解できない。

「お前、それでも人間か！？」

僕が殴りかかろうとすると龍妃が止めには言った。それでも僕は北

条に文句を言い続けた。

「自分の親を殺しておいて、何故笑っていられる？ 何故平然としていられる？ お前に人の心は無いのか、この殺人鬼！」

北条はくくく小さくと笑い出したかと思えば、いきなり大声で笑い出した。

「殺人鬼ねえ、うんいいね。人を殺す鬼。悪くない悪くない。北条刹那は殺人鬼があ。くうく、燃えて来るねえ。

気に入った。君、殺さないでくよ、まあといっても今日の間だけだ」

どうやらこの男は本当の意味でぶっ壊れているらしい。

「無駄だ、あの男は殺人衝動の塊みたいなもんだから話なんて通用しない。いや、俺達妖にそもそも話は通用しない、だから」

龍妃は僕から手を離して姿勢を低くする。

「殺しあう」

そして地面を蹴り、一気に距離を詰めて北条に切りかかる。その姿はとても美しく、そしてとても妖しかった。

破壊衝動〜コロシタイ〜（後書き）

次回予告、

形のあるものは壊れる。この世に永遠などない様に…。

次回、妖魔の月〜アラソイ〜

妖魔の月々アラソイ

龍妃のナイフは空を裂き、北条を切り裂こうとする。だが北条は体を捻り龍妃のナイフを避ける。

そして北条は体制を元に戻すと共に龍妃に襲い掛かった。龍妃はナイフを投げて北条を遠ざけようとした。しかし北条は顔を傾け、そのまま龍妃に斬りかかる

龍妃は床を蹴り、北条の攻撃を避けようとしたが、完全に避けきれず北条の左手が彼女の頬を引っ掻いた。

真つ赤な液体が彼女の頬を伝う。龍妃はそれを手の甲で拭い、懐から新しいナイフを取り出す。

『強化形か？いやその程度の能力を望むような本質をこいつは持っていない、それじゃあ…』

龍妃は試行錯誤を繰り返す。相手の能力を見切るため相手を見続ける。しかし見えない。ただそれだけでは見えているものも視えては来ない。

北条がゆらりと体を傾ける。規則性のない動きで龍妃に近づいていく。龍妃は北条の動きを目で追い、自分の攻撃圏内に入った瞬間、北条に切りかかる。それを見切った北条は姿勢を低くしナイフを避けた。

そして次は北条の手刀が龍妃を襲う。龍妃は床を蹴り空中へと逃げる。そして天井を蹴り、北条へと突っ込んでいく。

「馬鹿め、その位読めてるんだよ！」

北条は体を捻り回避、そして龍妃の肩を爪で抉る。かの様に見えた。龍妃のナイフが北条の爪を止める。しかし不思議なことにナイフと爪は接していない。まるで見えない壁があるかのようなだった。

北条はすぐさま身を引いたが、龍妃はその一瞬を見逃さなかった。そして龍妃の口から笑みが零れる。勝利への確信が龍妃の中で開花する。

「なるほど風か」

そう呟く龍妃はその長い髪を揺らし、北条に問いかける。

「そつだろ？ 北条」

北条は答えない。が、その沈黙自体が肯定を意味している。

北条の表情には怯えが混じっていた。まるで王を目の前にする雑兵のように圧倒的な格差に対する恐怖を覚えている。

『なんなんだよ、あいつは』

龍妃は笑っている。そして言い放った。

「今、恐怖したろ？ これでお前はオレの与える死からは逃れられない」

一歩一歩龍妃は北条へと近づいていく。

「死ね！」

北条がいきなり叫んだ。龍妃は何を感じたのか、ナイフで空を裂く。よく見ると床が少し削れていた。

「だから言つたろ？ お前の能力は既に視えてんだ」

龍妃の『骸崩の眼』が北条の死の本質を見つめる。

そして、龍妃は姿勢を低くし、地面を穿つ。そのまま一直線に北条目掛けて龍妃が飛ぶ。

「思い出したか？ これが死という奴だ」

そして北条の頭が飛んだ。綺麗に首から上がなくなっていた。そして頭を失った体は噴水のように血飛沫を上げながらゆっくりと後ろに倒れこんだ。

何がおきているのかまるで検討が付かない。気付けば既に血の海の中、僕は胃袋の中身を吐き出していた。何だ、この非現実。龍妃がまるで別人のように見えた。

「大丈夫か、今宵？」

龍妃の頬が服が腕が真っ赤に染まっている。行くときは純白だった龍妃のシャツは既に別な色に染め上げられていた。

その姿はまるで殺人鬼の様だった。

「どうして…」

咄嗟に僕の口から出た言葉は疑問だった。

「どうして人を殺したりなんかしたんだ」

僕は声を荒げた。その声は部屋全体に響き渡った。

龍妃は面倒くさそうに頭を掻く。

「はあ、いつかはこうなると思ってたけど、いざ巻き込むと面倒だな。いいぜ着いて来いよ、その代わり覚悟しろよ。お前はもう昨日までの生活は送れないからな」

龍妃は踵を返して出口へと向かった。僕は納得のいかぬまま龍妃の後に続いた。

そして着いたのは一つの教会。花壇には色とりどりの花が植えられおり、見た目は普通の教会だった。しかし、

「よう龍妃、そろそろだと思っただけで、なんだ男か？」

そう言っただけで教壇で一人タバコをふかしているのは真つ黒の服に右目には眼帯という意味不明な神父と思わしき人物だった。

「黙れクサレ神父」

龍妃はその神父の質問に罵倒で返す。

「相変わらず手厳しいねえ龍妃は、てことはアレか？」

「ああ、悪いが説明頼む」

龍妃はそういうと一つ大きな欠伸をして何処かへと行ってしまった。

「やれやれ。おい、その魔術師見習い！」

魔術師！？どうしてこの人がその事を知っているんだ？龍妃にも話してないというのに……。

「まあまあそう気張るなって、隠してても分かるもんなんだよ魔術つてのは」

そう言っただけで彼は徐に立ち上がり、僕の横を通り過ぎた。

「ちよつと外の空気でも吸おうじゃないか、同胞？」

やばい、僕この人嫌いだ。

そう思っただけでも顔には出さず着いていく。

「ふう、さて何処から話したものか……」

そう言つて彼は天を向き、煙を吐く。外は夏場だというのに少し肌寒かった。

「取り敢えず妖魔戦争つて知ってるか？」

妖魔戦争？何のことだろうか。

「その様子だと知らないみたいだな。」

妖魔戦争つてのは何年か前から一定の時期になると行われている異能者同士の殺し合いだ。もちろん俺ら魔術師だって異能者だからそれに参加することができる。

だが、魔術師はあくまでサブ。メインは魔術師とは別の力を行使する六人の異能者だ。そいつらは妖しい能力を持ち、その力でこの世の災悪を引き起こすことから、いつしか人々は侮蔑と蔑みを持つて『妖』と呼んだ」

男は短くなったタバコを捨て、新しいタバコに火をつける。そして深く吸い込み、白い煙を吐き出す。

「妖魔戦争の起源と言われているのは昔、一人の神主がその六人の異能者を戦わせてその勝者に褒美として願いを一つ叶えたということからだ。」

しかし一番初めの妖魔戦争の勝者は無し、最後の最後に異能者同士で合い討ちになった。そして二回目は一人の女が勝ち残り、三回目と前回にまで参加した。もちろん勝つたのはそいつだ。

そして今回そいつは参加していない。だが何故か異能者の枠が一つ余っている。だから俺はこう思っている。誰かがそいつを無理にでも参加させようとしてんじゃないかって」

まあ俺の知っていることはそれだけだと男は付け足した。話から察するにさっきの戦いはその妖魔戦争の一部に過ぎないってことか。

「他に何か訊きたいことはあるか？」

「あんたの名前、まだ聞いてない」

僕がそう言つと何がおかしいのか、彼はふつと微笑んだ。

「巫条だ、巫条ふじょう 如月きげつ。お前は？」

「天月あまつぎ 今宵だこよい」

男はタバコの煙を吐き出た。そしてタバコを投げ捨て、僕の横を通り過ぎて教会の中へと向かっていった。

「じゃあな少年。今宵は三日月だ、精々気をつけて帰りな」

そして、扉の前で彼は何かを呟いた。

「雨月のはぐれものか、これはなかなかいい拾い物をしたな龍妃」
僕は空を見上げた。そこには綺麗な三日月が僕を見下ろしていた。

妖魔の月々アラソイ（後書き）

次回予告、

骸あるもの何時しか壊れる。それと同じように骸なきものも何時しか崩壊の時がくる。それは誰しも同じ
次回、妄想逃避くゲンジツく

少女御杖くクチヨセシ

朝五時半、僕は目覚まし時計の喧しい音ではなく誰かが扉をノックする音で目を覚ました。こんな時間帯に来るなんて一体誰だ？

僕はベッドから降りて玄関に向かいながら、扉の向こう側にいる非常識人に対して返事をした。実際のところ出てはいけない気がするのだが、客人を待たせるわけには行かないだろう。

僕は前屈みになってドアを開ける。

「朝早く悪いな、とにかく上がらせてもらっよ」

扉の向こう側に居たのはジャージ姿の龍妃だった。龍妃は僕の姿を確認するとにこりと微笑み、僕の部屋へと入ってきた。

「どうしたのさ、こんな朝早くから来るなんて珍しいな」

龍妃が僕の部屋に来るときは大抵夜だったから正直僕は朝早くから来た龍妃に戸惑った。龍妃は部屋の奥へと進んでいく。僕は扉を閉めて龍妃の後ろを歩く。

そしてリビング兼寝室に着くと龍妃は、

「相変わらず何も無いな、テレビすらないなんて学生の部屋とは思えない」

と部屋を一周ぐるりと見渡してからそう嫌味のように言った。

「龍妃だって持ってないじゃないか」

僕はそう言っただけでベッドの端に座る。龍妃は取り敢えず部屋の真ん中に胡坐をかいて座る。

「まあオレは必要としないからな。で、何処まで聞いた？」

龍妃は軽い調子で訊いてきた。どうやら世間話をするつもりでは無いらしい……。

「なるほどね、最古の妖か。面白い、殺し甲斐がありそうだ」

龍妃は僕の話聞き、楽しそうにそう言った。それに対して僕は、「だから、人殺しは駄目だってこの前も言っただじゃないか」

と焦ったように言う。実際、これ以上龍妃には誰も殺して欲しくない。

「相変わらずだな、いいか？　これは戦争なんだ、殺らなきゃ殺られる、そういうもんなんだよ」

龍妃は意見を帰る気は無いらしい。僕はそれでも龍妃を止めようとする。

「でもだからって殺していいって訳じゃないだろ？　僕は君が心配だから言ってるんだ」

「オレの心配なんてしなくていいんだよ、お前は自分のことだけ考えてろ、お前だって魔術師なんだろ？　魔術師である以上妖魔戦争に関われば命に関わる」

龍妃は面倒くさそうに片足を抱え込んで俯いた。どうやら龍妃なりに心配してくれていたらしい。

「分かった、でも出来るだけ殺さないって約束してくれ」

「ああ、じゃあオレは帰るわ、鞆、家に忘れてきたし」

そう言うて梗越寺龍妃は帰っていった。

僕はいつもより一時間ほど早く家を出た。理由は教会によるためだ。まだ朝だがあの神父は居るだろう。

「失礼します」

僕は恐る恐る両開きの扉の片方を開く。すると中で小さな白い修道服に身を包んだ銀髪の少女がマリア像と思しきものの前で祈りを捧げていた。

僕は邪魔にならぬように脇でそれを見ていた。

少女はとても可愛い外国の娘だ。瞳が閉じられているため瞳の色は分からないが、白い肌でとても小柄、身長は多分十三、四歳程だろう。

暫くすると少女は立ち上がって不思議そうな顔をして此方を見た。

「まよえるかみがみに、こひつじのかごを」

神様が迷ってどうするんだよ……。

「よう少年、来ると思ってたぜ」

後ろからあまり聞きたいと思えない声が聞こえた。クサレ…巫条神父だ。

「今腐れ神父つて言おうとしたろ」

巫条神父は煙草をくわえ、夏だというのに黒い長袖のスータンを身に纏っている。それなのに汗一つ掻いておらず、涼しい顔をしている。

そんなことより、

「このシスターみたいなのは子はどこから誘拐してきた？」

こんなところにこんな少女がいるということを問わねばなるまい。

「違ーよ、こいつはアリサつていって、ここでシスターやってんだよ、お前いつたい俺をなんだと思ってるんだ？」

巫条神父はギロリと鋭い目で此方を睨む。何って犯罪者予備軍？

僕がそう言おうとした瞬間、祭壇の奥の扉から一人の少女が入ってきた。

「犯罪者予備軍が何言ってるのよ」

その少女は僕のよく知る人物であり、そしてここにしているのが不自然な少女だった。

「御杖、何でここにいるの？」

御杖 みつえ きょうじ 杏子、僕と同じクラスで弓道部に所属するごく普通の少女。

髪は漆黒でブラウンの瞳はとても美しい。背丈は高くてすらりとしたスタイルがごく一部だが男子に人気がある。しかし性格は少々きつい。それさえ直せばもっと人気が出るのだろうけど……。

「それはこっちのセリフよ、あんた何でここにいる訳？ こことはあんたみたいなのが来るところじゃないわ、さっさと帰りなさい」

御杖はそう言ってアリサちゃんに近づく、

「アリサ、お祈りは終わった？」

なんだ、すごく背中が痒い。クラスの男子を一日に一度は罵っている御杖がこんな優しいことを言えるとは思わなかった。

アリサちゃんは小さく頷いて御杖の手を握る。

「で、なんでこいつがここにいるのよ、もしかして関係者なんて言わないでしょね？」

御杖は近くで煙草を吹かしている腐れ神父にそう訊いた。

「残念だが関係者だ、そいつは魔術師だよ」

巫条神父は白い煙を吐いてからそう言った。御杖は呆れた顔で、

「てことは龍妃のやつミスったわけ？」

巫条神父は絨毯の上に煙草を捨て、火を踏み消した。そして新しい煙草を取り出した。

「どちらにしろ、そいつはここに来ていたよ、魔術師ってのはそういうもんだ、いつでも自分の因果は変えられない。遅かれ早かれそいつは妖魔戦争に関わってたさ」

御杖は納得いかないという顔をして黙り込んだ。

「そんなことよりいいのか？ そろそろ遅刻するぞ？」

携帯で時刻を確認するとすでに遅刻ギリギリの時間だった。

僕は御杖と同じくギリギリで教室に入った。

「遅刻ギリギリだぞ、さつさと席に着け」

担任兼国語担当の有原^{ありはら}調先生^{しらへ}。三十二歳の独身女性、黒く漆でも塗られているかのような長い髪は腰まであり身長も高い所為か生徒からはカッコイイ女性として人気の高い先生なのだが、時折とんでもないミスをしてしまう少々お茶目な点を持ち合わせている。

「全員いるな。よし、では連絡事項だ。昨晚蓮杖マンション、通称人喰いマンションに複数の生徒が侵入したらしい。其処に居合わせた奴はこのHRが終わり次第、資料室に来い。以上だ」

僕は龍妃と顔を合わせた。龍妃はやれやれと言う顔をしている。ど

うやら観念するしかないようだ。

僕と龍妃は先生に言われたとおり、先生のいる資料室を訪れた。

「お前らか、珍しいこともあったものだ」

有原先生はコーヒーを一口啜ってからそう言った。

「遠くから見えたあんたに言われたくないね。で、何の用？」

龍妃は気だるそうにそう言った。遠くから見えた？何のために？

「おいおい部外者の居る前で話すな、情報が漏れたら大変なことになるぞ？」

「残念だが関係者だ、記録係の魔術師の癖に聞いてないのか？一応巫条には言ったつもりだぜ？」

僕は一人何のことやら分からずあたふたとしている。先生が魔術師？どうということ？

「私は妖魔戦争の記録係をやっててね、誰が死んだとかそういうのを記録して、魔術教会やら何やりに報告している身だ。何、そう大儀なものじゃないさ」

「どうでもいいがさっさとしてくれ、こっちは無駄話に割いてる時間なんてないんだ」

龍妃は面倒くさそうに先生の机に座った。

「ああそうだったな、悪い悪い。用って言うほどのことではないんだが、一つお前らに言っておくことがある。

昨日お前が切り崩した奴、確か北条と名乗っていたな。あいつまだ死んでないぞ？」

北条：蓮杖マンションに住まう殺人鬼。アイツがまだ生きてる？首から上を失ったのに？

「まあ話は最後まで聞け、鴉柳がりゅう霧真きりまがあの後北条を一時的に蘇生させた。流石は人類最古の結界師の家系だ、あんなやつじゃ魔術教会が捕まえたがるのも判る気がする。

とにかくアイツは死んでない、そしてまたお前を殺しに来るだろうが、次は確実に殺せよ、龍妃」

「言われなくてもそのつもりさ、巫条やアリサだって居るんだ。次は確実に切り崩してやるよ」

先生はそれを聞いて微笑む、それと対照に僕の不満は積もっていく一方だった。

「じゃあお前らは戻れ、私にも仕事があるんでね」

僕らは適当に返事をしてその場を去ろうとした。

「ちゃんと守ってやれよ、そいつ一人じゃいつか食い殺されちまうからな」

先生が何か言ったような気がしたが上手く聞き取ることが出来なかった。

僕はここ最近とても気がかりなことがある。それは何故授業というのは睡眠に適しているかということ。僕は襲い繰る睡魔と戦うことも無く敵前逃亡し、今情眠を貪るという至福の一時を過ごしている。

その顔はきつとかなり間抜けなのだろうけど僕は構わず貪り続ける。しかしいつまでも至福は続かないものである。

「ほう、私の授業は相当退屈のようだな、天月？」

何せ、今受けている授業は有原先生の授業。そして僕は授業の最中に机に突っ伏して寝ている最中、その結末は……、

「貴様は放課後居残りだー！」

こうなる訳でして……。

放課後、僕は資料室から必要でなくなった資料を捨てに行くということで居眠りの件は許してもらえた。そしてその資料を運び出しているると帰り際の御杖に出くわした。

「御杖、今帰り？」

僕は資料の詰まったダンボールを両手で抱えるように持ち御杖に話しかけた。

「話しかけないで馬鹿が移るわ」

相変わらず辛辣な返答ですね、御杖さん。

「馬鹿は移らないと思うな……」

僕がそう言っていると御杖はキツと此方を睨みを睨んできた。

「知ってるわよ、馬鹿」

それだけ言って踵を返し、そそくさと行ってしまった。

「嫌われてんのかな？」

御杖の態度は男子であれば誰に対してもではあるが正直そう思わざるを得ない。いやそう思わせるようにしてるのかもしれない……。

下校途中、既に日が落ち始め、煌く夕日が眩しいこの坂の今宵は一人虚しく登っていく。今宵は先ほどまでの労働で乾いた喉を潤そうと道の途中にある自動販売機の前で立ち止まる。

坂の上からサラリーマンらしき男が一人とぼとぼと降りてきたのが見えた。

男は自販機に近づいていく。今宵がジュースを買おうと財布从小銭を取り出そうとしたその後ろで男の手が伸びる。

そしてそのままその手は今宵の首を掴んだ。

「ぐっ……」

小銭の落ちる音が響く。今宵は一瞬、何が起きたのか分からなかった。只、氷のように冷たい何かが彼の首を締め付けているということはすぐさま理解できた。

男は何も喋らない。いや、そもそも覇気が感じられない。まるで死人か人形のように只、今宵の首を掴んで離さない。

骨の軋む音が聞こえる。このままでは首の骨が折れてしまうだろう。今宵は必死に抵抗しようと裏拳で男の顔を殴りつける。しかし男は離さない。徐々に今宵の意識が遠退く。

『やばい、このままじゃ……』

今宵がそう思ったその時、一瞬にして首に掛かっていた力が無くな

った。

そして、なにやら硬いものが落ちる鈍い音と共に男は倒れた。今宵は自販機に手を着き、そのまま背中を預けた。其処に今宵のよく知る少女、梗越寺龍妃が佇んでいた。

「大丈夫か、今宵」

その言葉は友人に対するモノではなかった。心配しているという素振をあまり見せず、今宵の足元に転がる金銭を回収し今宵の財布に入れて返す。

「わかったか？　これが殺し合い、妖魔戦争の恐ろしさだ。オレのことを異常者だと思うならそれでもいい、じゃあまた教会でな、今宵」

動けぬ今宵にそう告げて龍妃は何処かへ去ってしまった。

少女御杖くちヨセシく（後書き）

次回予告

長い夏、終わりを知らないかのように煌々と光る太陽の下、長い
休暇が始まりを告げる。

次回、夏季休暇くナツヤスミく

夏季休暇〜ナツヤスミ〜

夜が深まり、街は静かな眠りについている。その街中を一人の少女が駆ける。少女は学生のように紺色のブラウスを身に纏い、短いスリットの入ったスカートを履いているのだが、その腰には歳に似合わない黒く光る「CZ75」というハンドガンが入ったポーチをつけている。

少女の後ろからは体格のいい男が五、六人程、追いかけてくる。男達は皆、黒いスーツに黒いネクタイ、更には黒いサングラスと全身黒尽くめ。右の胸元にはすこし膨らみがあるのを見ると何かの組織的存在であるだろう。

少女は黒く短い髪を揺らし、追っ手から逃げるために小さな路地に入る。追っ手との距離はまだ十分にあつる。それを確認して入り組んだ道を進んでいく。少女の息は次第に荒くなっていく。

しかし男達は至って冷静で目標から目を離さぬよう追いかける。それでも見失った場合は二手に別れ、少女を追いかける。

気付けば場所は港付近の倉庫。辺りには運ばれた鉄パイプなどが山積みになっていた。

少女はコンテナが入っている倉庫の中に入り、ポーチからハンドガンを取り出して安全装置をはずし身を潜める。暫くすると先ほどの男が二人入ってきた。少女はコンテナの間から顔を出し、男たちを視認すると標準を合わせ引き金を引く。小さい爆裂音と空薬莖が落ちる音が倉庫に二回響いた。

しかし弾丸は片方が男のイヤホンを切っただけで、逆に少女は自分の位置を男たちに知らせてしまった。

だが少女は撃ち続ける。最大装填数の十六発目を撃ち終わると少女は足音を立てぬように場所を移動しながら弾倉を入れ替える。男達はコンテナの陰に入り胸下に潜ませた「MK23ソーコム」という特殊部隊向けの拳銃を取り出した。銃口にはサイレンサーが装着

されていた。

男の一人が仲間に連絡を入れ他の男たちを呼んだ。数分もしないうちに少女は袋の鼠。逃げ場がなくなっていた。少女は息を整えコンテナの隙間から一気に駆け出す。男達はそれを見逃さず、少女を狙い撃つ。

その瞬間、少女の目の色が変化した。

少女は立ち止まり引き金を引いた。彼女の弾丸は男たちの弾丸に当たり拉げた。更にポーチの中から手製の手榴弾を二つ取り出し、男たちの足元に投げる。男達はその場から逃げようとしたが、その手榴弾が爆破した瞬間、中からパチンコ玉くらいの鉛が飛び出し辺りに拡散した。その鉛を全身に浴びた男が二人死亡。他の男たちも軽症を負った。

少女はまだ死んでない男三人に狙いを定めを引き金に指を掛けた。

夏休み初日、その日はこの夏の最高気温を軽く越え、じつとりとした熱い日となった。僕はというと大きな荷物を持って、ろくにクーラーも備え付けられていない巫条如月神父の教会に来ていた。

別段、教会に用は無いが、龍妃に言われた以上来るに他が無い。

僕が祭壇の上に座っていると奥から巫条神父が出てきた。

「よう、来たか」

相変わらずの啞え煙草。軍人でも着けていなさそうな黒い眼帯。夏場だというのに黒い長袖のスータンを身に纏っている。まったく見ているだけでも暑苦しいのに汗の一つも掻いていない。

その後ろには僕を此処に呼びつけた張本人、梗越寺龍妃が相も変わらず可憐に、それでいて気だるそうにしていた。黒のキャミソールに黒のショートパンツを身に纏い、とても眠そうに大きなポストンバッグを背負っている。

「じゃあ出発するでしょう、混んでくると面倒極まりないからな」
巫条神父はそう言って教会の出口を目指す。

アレは昨日の出来事だった。

「お前、泳げるか？」

放課後の下校途中、僕の数少ない友人の一人、梗越寺龍妃は唐突に訊ねてきた。

「うーん、暫く泳いでないからなあ。それでも人並みには泳げると思うよ？」

龍妃は興味なさそうに聞き流している。自分で訊いてきたのにそれは酷くないかな？

「じゃあ明日、教会に朝八時半に来い。巫条が望月海岸に用があるらしくてな、ついでに海に行こうって話になったんだ、面倒だからお前も来い」

面倒だと思うなら断ればいいのに、と言おうとしたが巫条神父のことでだ。僕らに拒否権は無いのだろう。

「まったく呑気だよな、いつ妖が襲ってくるかもしれないってのに……」

龍妃はブツブツと愚痴を溢す。確かにそうだ。この前、僕を襲ってきた男（の形をした人形）を操っていた魔術師の正体だってはつきりしていないというのに。

という訳で僕らは巫条神父のメルセデス・ベンツに乗り込み、今御杖とアリサちゃんの待つ駅へと向かった。距離的に御杖達は教会に来るよりそちらのほうが海にも近いのでそこで落ち合うことにしたのだ。

「お前ら、せっかくの旅行なんだ。少しは楽しそうに出来ないのか？ 揃いも揃って辛気臭い」

大きなお世話だと言おうと思ったが体力の無駄遣いな気がしたので

やめた。

「そんなことより用事って何だ？ この前の人形と何か関係あるのか？」

龍妃は面倒臭そうに巫条神父に問うた。巫条神父は長くなった煙草の灰を落として再び口に啜えてから話し始めた。

「半分正解といったところだな、時に我が弟子、お前の住んでるところは筑依神社に近い。違うか？」

筑依神社、望月市唯一の神社で年に一度大社祭という夏祭りが其処で開かれている。

「弟子になつたつもりは無いです。まあ、かなり近いと思うとは思いますが。少し歩いて山を登ればすぐですし」

「龍妃には既に話したんだが、筑依の一族ってのは結構昔から続く魔術師の血族でな、奴らは生と死の境界、つまりは『誰も到達しない未知の境界』ってのに至ろうとしてるんだよ。『死の根源』というのはいろんな魔術師が到達しようとしているがその中間、『境界線』に触れようとしたものは数少ない、何故なら常に『境界線』というのは誰しもが経過する過程だとしか考えられないからだ。

だが奴らはその過程にこそ『死の根源』への道はあると信じた。しかし到達できないからこそ境界線。生きているものと死んでいるもの、二つの間に触れることなかなか叶わぬ夢物語だと誰もが思っていたのさ。

そんな奴らにある日、思わぬ偶然が起きた。生を保ちつつ死の世界を視える存在が現れた。奴らは全力でそいつを捕まえようとした。せつかく見つけた手がかりだ、捕まえたくてしょうがない。が、いつでも抑止力というのは必然的に掛かってしまう。一人の魔術師がそいつの力を殺してしまったんだ。

それで筑依の魔術師達は怒りだしたんだが、この妖魔戦争に同じような力を持った奴がいるんで今度はそいつを使おうとしている」

ここでいう二人目のそいつとは十中八九龍妃のことを指すのだろう。

「それで僕を人質に取ろうとしたってことですか？」

「ご名答、と巫条神父は言った。

「奴らはお前を捕まえれば、そいつを捕まえられると考えたのだろうが、残念なことにそのために使った使い魔が殺された。となれば次は本当の実力行使で来るやもしれん」

「どっかの妖と手を組んでるってことか？」

巫条神父の長台詞に口を挟むように龍妃は尋ねた。

「そういうことだ。そんでもってつい三日前、俺の使い魔が妖らしき少女を発見したんだ。その場所が港だったんで、痕跡を探り、あわよくば妖の情報を得ようというのが俺の目的だ」

巫条神父の長い説明が終了すると望月駅付近まで来ていた。辺りでは昨今に立てられたビルが背比べをしていた。

その後は御杖と麦わら帽子を被ったアリサちゃんと合流し海へと向かっていく。その途中龍妃と御杖が喧嘩を始めたがいつものことと受け流した。

そして移動すること一時間。僕らの目の前には一面の蒼い絨毯が広がっている。浜辺には既に何組かの家族とかが我先にとビニールシートを広げている。

「さ、先に宿に荷物を運ぶぞ、男女部屋は別々だから間違えるなよ？」

ということとは僕は巫条神父と二人きりということか、ある意味、罰ゲームとしか思えないが男が二人だけなのだから仕様が無いだろう。宿はとても綺麗な処だった。部屋の広さは九畳ほどだが二人で使用するのであれば、かなりの広さである。ちなみに障子窓が着いているのだが其処から海が一望でき、かなり見晴らしがいい。

「結構綺麗なところだな」

巫条神父は荷物を運び終わるとポケットから煙草の箱を取り出し、底を叩いて煙草を一本出すと、それを啜ってライターを探す。

「おい、ライター持ってないか？」

この人、僕を何だと思っているのだろうか？

「持っていない。僕、まだ未成年ですよ？」

「そうか、仕方ない」

そう言って巫条神父はポケットから紙とペンを取り出して何かを書き始める。そしてその紙の端を持つと、紙はいきなり燃え始めた。

「本当はあまりこういうところでルーンを使いたくないんだ。魔術師にとつては隠蔽こそが自分を守る術でもあるからな、誰が見ても知れんところで一般人に見られたりすれば、それだけで魔術の質は半分くらいに低下してしまうからな」

なら煙草を諦めればいいものを、と思ったがこの人にそんな事を言っても聞き流されるのが関の山だ。

「遊びに行くなら行つていいぞ？ 俺は少しやることがあるからな」
そういうとまた違う紙に何かを記述し始め、黙々と作業をしていく。
僕は邪魔にならぬようにと部屋を出た。

取り敢えず僕は先に水着に着替え、ビニールシートと日除け用のパラソルを立てる。ある程度の準備が終わると女子達がやってきた。

「だからオレは泳がないって、別に脱ぐ必要はないだろ？」

「あんたね、海に来たら泳ぐっていうのセオリーでしょうが！」

「りゅうひ、およげない？」

女子達の格好は何というか彼女達らしい格好といえよう。

まず御杖は今時の女子高生らしい水色のビキニ。露出度の高い水着姿の所為か、御杖のボディラインがくつきりと分かる。

アリサちゃんは歳相応に少女らしいワンピースタイプの純白の水着。泳ぎが苦手なのか、浮き輪まで所持しており、これはある意味そっち側が好きな人たちからすれば需要の高い水着姿だろう。

そして、最後に龍妃なのだが、少し長めのパーカーを着ている所為で水着が見えないが、少し恥ずかしそうにしているのを見るとても可愛らしい。

「あら、準備が早いわね。如月は？」

御杖が辺りを見渡して巫条神父を探す。

「用があるから遊んでろ、だつてさ」

「そんなことより今宵、何とか言つてやつてくれ、御杖がオレに泳げ泳げって煩いんだ」

龍妃は堪らず僕に助けを求める。しかし僕の答えは、

「せつかく海に来たのに泳がないっていうのはもったいないと思うよ？」

だつた。救いの手がないと分かつて龍妃は少し項垂れて、パーカーの前のチャックを開けた。

その隙間から見えたのは黄色い水着。ビキニよりは露出度が低いのが可愛らしいフリルが付いている。いつもの龍妃からは想像できないような可愛らしい格好に僕は目を奪われた。更に龍妃が少し恥ずかしそうにしているのだから余計可愛く見えてしまう。

「さて、一番の堅物が泳ぐつて決めたことですし、早速行きましょ！」

御杖の掛け声と共に僕らは青い海へ飛び込んだ。

遊んでいるうちに気が付けば日が傾き始めていた。僕らは海から出て着替えを終えると宿へ戻る準備をした。

「ああ楽しかった」

御杖は満足そうにそう言った。その隣でアリサちゃんは相当疲れたのか目が半開きになっている。

僕は隣を歩く龍妃に訊いた。

「龍妃、楽しかった？」

龍妃はまだ湿っている髪を手串で解かしながら

「ああ久しぶりに妖魔戦争のことを忘れて遊ばせてもらったよ。またにはこういうのもいいものだな」

僕は龍妃の方を見た。夕日に照らされた彼女の姿は可憐で美しく少し頬が紅くなっている気がした。僕はその日、久しぶりに彼女の心からの笑顔を見た気がした。

暗い闇が街を包み込む漆黒の下、街灯の明かりと月の輝きだけを頼りに巫条如月は煙草を啜えながら夜の街を練り歩く。辺りに人気は無い。彼の張った結界が少しばかり早く街を眠りに誘った。

天高く上がった月が彼を晒う。彼が向かっているのは港近くの倉庫。昼間の探索でやっと見つけた痕跡を辿っていく。

その途中、彼は一人の少女と出くわした。彼の口元は笑みを溢していた。

「見つけたぜ、殺人鬼」

少女の表情は影になって見えないがきつと恐怖していたのだろう。一瞬後ろにたじろいだ。

如月はポケットに手を入れ、余裕の表情を見せている。彼は街灯三つ分奥にいる少女を見続ける。

少女の口がパクパクと金魚のように動き、小さな声を発した。

「あなたは、何処の人？」

少女は綺麗で穏やかな声だった。

「お前の質問は俺が筑依の人間か、ということか？ それとも

この時間軸の人間かということか？」

如月の口調には相手に対する侮蔑が込められている。時間軸の変動、それがその少女の能力。ちから

「な……んで……」

如月の表情はその一言を聞いて冷たいものになる。凍てつく表情に少女の表情は尚、強張る。

如月は短くなった煙草を投げ捨てた。その目は既に相手に対する興味が消えている。

「俺が話したいのはお前じゃない。そこにいるんだろ、出て来いよ？」

その一言に少女の表情に笑みが溢れてくる。先ほどまでそこにいた少女はまるで別人、いやもう既にそこにいなかった。

「ふうん、あんた魔術師なんだ。最初、妖かと思っうって幻に話させて

みたけど魔術師なら私が話しても問題ないわね」

少女の豹変に大した反応を見せず、新しい煙草を取り出し火をつける。

「お前が本体か？ いや、この質問に意味は無いか、お前にとって自分というのは当の昔に消えているものだろ？ 伽藍桐の心に棲み

付いた妖のお前と人間のお前は常に別人格、どちらが本当かなど訊くだけ無意味だな、そうだろ？ 双月^{ふたつき} 現^{うつ}」

現と呼ばれた少女は飽きた風に髪の毛を弄っている。如月は構わずに続けた。

「現と幻、二人のお前は自分がいつからいるのか、自分の発生^ルした由来すら分らない。だからお前は時間軸をずらし、辿ろうとしたが気付けば自分が何処の人間かも分からなくなっていた。

今のうちに言っとくがお前はもう戻れない、例えこの戦いに勝ってもお前の願いは叶わないぞ？」

「別に私はそんなことどうでもいいわ、今私が興味を持つてるのは筑依のやつてる『誰も到達しえない未知の境界』に至るっていうことだけ。幻はどうか知らないけど……」

それだけ言って現は踵を返した。彼女にとってこの時間はとても無意味なものに過ぎない。如月の論説に対する興味を失った彼女はポケットに手を入れ、立ち去ろうとする。が、一瞬足を止め視線だけを如月に向ける。

「近いうちまた会うと思うけど、これだけは言っておく。これ以上深入りすると貴方死ぬかもしれないよ？ 吸血姫の眷属さん」

その一言を残し双月は去っていく。その場に残された如月は雲に隠れた月を見上げて白い息を吐いた。

そして月の光の届かぬ大地で只、無情の時間を過ごし続けた。

「気をつけろよ アイツは一筋縄では崩れんぞ」

暗闇に浮かぶ月が雲の合間から顔を出し、彼を晒っていた。

夏季休暇〜ナツヤスミ〜（後書き）

次回予告

とある日の昼下がり、街中で困惑する御杖杏子は『木霊 煌』に救われる。会ってはいけない二人は因果を知らずに絆を持つ。

次回、禁録昼夜〜ハクチュウム〜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2394x/>

骸崩の妖～Sword of Guardian～

2011年12月17日21時46分発行